

# ダニエル書 - 第十四

## ダニエル書第2章 - 要約と結論 第1部

Jeff Pippenger

2023-12-09

黙示録において、聖書のすべての書は合流し、完結する。ここでダニエル書は補完される。『使徒行伝』585頁。

ヨハネが「イエス・キリストの黙示」と呼ぶ、ユダ族の獅子が2023年7月以来その民のために封印を解いてこられたその真理は、ダニエル書を黙示録と合わせて読むとき、完結する。ダニエル書第2章は、終わりの時代における「獣の像」の試練という文脈で、第二の天使のメッセージを表している。これは、試練の過程と特定の試練の期間を示している。

ダニエル書第2章の期間と過程は、ダニエルの捕囚の七十年によって表されており、それはミラー派の歴史におけるプロテスタントの試練の期間を型として示していた。プロテスタントはその試練の過程に失敗し、ローマの娘たちとなった。預言的に言えば、娘はその母を象徴し、ローマは預言上の獣である。彼らの失敗と、それに続くローマの娘たちへの移行は、彼らが獣の像へと移行したがゆえに、現在の私たちの歴史における獣の像の試練を型として示している。ゆえに、私たちの現在の試練の過程は、ダニエルの捕囚の七十年によって、またミラー派運動における第二の天使のメッセージの歴史によっても表されている。

2001年9月11日に始まった第二の天使のメッセージの歴史において、特定の期間と試練の過程があり、それはネブカドネザルの獣に関する像の夢として象徴的に表されている。というのも、聖書の預言においては王国もまた獣として表されるからである。ネブカドネザルとカルデヤの宗教的エリートはその試練を通過できない者たちを表し、ダニエルと三人の勇士はその試練を通過する者たちを表している。一見そうは見えないかもしれないが、ネブカドネザルの失敗はダニエル書3章で確認されている。

試練の過程はダニエル書1章と2章の双方に描かれており、そこには最近黙示録で示された真理と一致する特定の予言的な道標がある。1章では、「十日間」が、天の糧を食したことによりダニエルがより麗しく肉も肥えた姿を現すに至った試練の期間を象徴しており、一方、別の宦官の一群は、王の食物を食べた者たちの姿を現した。預言的には、王は王国を指し、また王や王国は獣でもある。王の食物を食べた結果がその顔つきに表れた者たちは、獣の像を現した。

ダニエル書2章で、ダニエルはネブカドネザルの像の夢に隠された「奥義」を悟るために祈っていた。彼は、その夢が何であったのか、また何を意味するのかを知る必要があった。彼は、イエス・キリストの黙示の封印が解かれることに伴う奥義を理解しようと求める終わりの時代の人々を代表している。というのも、イエス・キリストの黙示の封印が解かれることは、恩恵期間が閉ざされる前に解かれる最後の預言的な「奥義」だからである。ダニエルを含むすべての預言者は、終わりの時代を指し示している。ダニエルがその「奥

義」を理解しようとした試みは生死を賭けたものであったが、同様に、終わりの時代における神の民に対する「獣の像」の試練も生死に関わるものである。

「主は、猶予の時が閉じられる前に獣の像が形成されることを、私にはっきりと示された。というのも、それが神の民にとっての大いなる試練となり、そのことによって彼らの永遠の運命が決められるからである。」『Manuscript Releases』第15巻、15ページ。

「奥義」を理解しようとしたダニエルの祈りは、終わりの時における神の民の歴史の中で、特定の道標を表している。ダニエル書は、終わりの時における「祈り」という道標を確立する二つの証しを与えている。その道標は、各改革線の第二のメッセージによって表される期間に位置づけられている。

両方の祈りの預言的背景は捕囚の七十年であり、それは象徴としてレビ記二十六章の「七つの時」を表している。ダニエル書二章第一節では「ネブカドネツアル」という名が重ねて記されており、聖書における語の重複は第二の天使のメッセージの象徴である。

シスター・ホワイトの著作には、ダニエル書3章を日曜法の象徴であると示す記述がいくつかある。ダニエル書1章には第一の天使のメッセージのすべての特質が備わっており、第一と第二のメッセージなしには第三のメッセージ（ダニエル書3章）は成り立たないと教えられている。

獣の像の試練は、恩恵期間が閉じる前、そして私たちが印を受ける前に通過しなければならない試練であると、エレン・ホワイトは定義している。ダニエル書第3章で音楽が奏でられたとき、象徴的に恩恵期間は閉じた。というのも、第3章は日曜法を表しているからである。ネブカドネツアルの音楽は、彼女が忘れられていた象徴的な七十年の終わりに、ツロの娼婦が地の王たちに歌い始める旋律を表している。

その日には、ツロはひとりの王の年数に従って、七十年のあいだ忘れられる。七十年の終わりには、ツロは遊女のように歌うであろう。忘れられていた遊女よ、琴を取り、町をめぐれ。甘美な調べを奏で、多くの歌をうたえ。人に思い出されるように。七十年の終わりには、主がツロを顧みられ、彼女はその稼ぎに戻り、地の表のすべての王国と姦淫を行うであろう。イザヤ書 23:15-17

ホワイト夫人は、三天使のメッセージを三つの試験とみなしている。

「第一と第二の天使のメッセージのもとで花婿を迎えに出て行った多くの人々は、第三の、すなわち世界に与えられる最後の試練のメッセージを拒んだ。そして、最後の呼びかけがなされるときにも、同様の態度がとられるであろう。」Review and Herald, 1899年10月31日。

いくつかの証言によれば、ダニエル書2章は第二の天使のメッセージである。第一の天使が力を受けてから裁きに至るまでの歴史は、ダニエルの捕囚の七十年によって表されている。2章に描かれているダニエルの祈りの場面は、この七十年の間に起こっており、この七十年は「七つの時」の象徴である。

九章の祈りは、七十年への直接的な言及から始まる。両方の祈りの預言的な枠組みは同一である。それらは同じ祈りの異なる側面を表しているが、いずれも「七つの時」という同じ設定に置かれており、また、終わりの時代の十四万四千人の歴史に置かれている「祈り」という道標とも一致している。

ダニエル書九章でダニエルが祈るとき、彼はバビロンの王国からメディアとペルシャの王国へと移行する、予言的な「移行期」にいる。その移行点もまた道しるべであり、神の民が「ラオデキア人」として通りで死に、「フィラデルフィア人」として墓から出てくるといふ、第三の天使の運動における同じ移行点とも一致している。第一の天使の運動の移行点は、ダニエルの移行点と第三の天使の運動の双方と一致し、しかも三者はいずれもレビ記二十六章の「七つの時」と直接結びついている。ミラー派運動におけるフィラデルフィアからラオデキアへの移行は、1856年に「七つの時」に関する「新しい光」が到来したこと、そして1863年に「七つの時」自体が全面的に退けられたことによって起こった。ダニエル書九章、ミラー派時代の第一の天使の運動、そして私たちの時代の第三の天使の運動は、いずれも互いに一致する移行点を持ち、その三つの移行点はいずれも「七つの時」という文脈の中に置かれている。

試練の過程の歴史において、ダニエルは、光を与えられ、その光をまず三人の仲間と分かち合う使者を表しており、こうして「荒れ野で叫ぶ声」である「エリヤ」の預言者的役割の型を示している。

ダニエル書2章の「秘密」は、聖書の預言における第八の王国が「七つのうちの一つ」であることを明らかにしている。聖書の預言における諸王国の最初の象徴的表現であるがゆえに、それは黙示録17章にある諸王国の最後の象徴的表現と結びついている。第八の王国は、先行する「七つのうちの一つ」であるため、竜と獣と偽預言者の三重の連合として現代のバビロンを確立する移行点を指し示している。ネブカドネツアルの像の夢は、究極的には預言史における地上の第八の王国を指し示している。

聖書の預言においては、王国は獣を象徴する。したがって、ネブカドネツアルの像の夢が表す真理は、黙示録十七章でも特定されている最後の獣への最初の言及である。ゆえに、ネブカドネツアルの夢は、究極的には、第八にして最後の獣の像の夢である。すなわち「獣の像」の夢である。

それ自体が、第三の天使の運動に生じる転換点を認識することの重要性の確認であるが、その「秘密」はまた、2020年7月18日以後の歴史についてこれまでの記事が指摘してきた多くの点を統合し、確立する鍵でもある。これらの記事では、ダニエルの七十年の捕囚に象徴される聖なる改革運動のそれぞれにおける四つの道標が、常に同じテーマを有していることが示されてきた。

キリストの時代におけるそれら四つの道標は、「死と復活」という文脈の中に据えられていた。第一の道標は、第一のメッセージに力が与えられたことを表すもので、死と復活の象徴であるキリストの洗礼であった。第二の道標は、その歴史における最初の失望を表し、ラザロの死と復活であった。第三の道標は、真夜中の叫びを表すエルサレムへの凱旋入城であった。キリストはご自身の死と復活へと向かっておられ、死と復活の生ける代表であるラザロがその行列を先導した。さらにラザロは、真夜中の叫びが宣べ伝えられる間

に、神の民が「封印」されることをも確証している。

この最後を飾る奇跡、すなわちラザロの復活は、主の御業と主の神性の主張に神の印を押すためのものであった。『The Desire of Ages』529ページ。

裁きの第四の道標は十字架であり、それは死と復活でもあった。これら四つの道標の期間は、ダニエルの七十年の捕囚によって表されている。

ミラー派の歴史では、主題は「一日一年の原則」であり、1840年8月11日はその原則が確認された日であった。最初の失望は、一日一年の原則を誤って適用した結果であった。「真夜中の叫び」は、二千三百年の預言と二千五百二十年の預言に関連して、一日一年の原則の完成であり、そしてそれらの一日一年の預言が1844年10月22日に成就したときに調査審判が始まった。ミラー派の歴史における四つの道標すべての主題は「一日一年の原則」であった。それら四つの道標の期間は、ダニエルの七十年の捕囚によって表されている。

ダビデ王の時代、焦点は「神の箱」にあった。ダビデが力を与えられたとき、彼は神の箱をダビデの町に運び入れようと決意した。

ダビデは進み、ますます大いなる者となり、万軍の主なる神が彼とともにおられた。  
サムエル記下 5:10。

最初の失望は、ウザが契約の箱に触れて罪を犯したときであった。第三の道しるべは、ウザの反逆以来契約の箱が保管されていたガテ人オベデ・エドムの家を主が祝福しておられることを、ダビデが悟ったときであった。そこでダビデは箱を取りに行き、エルサレムへの凱旋入城のためにそれを運んだ（ところが彼の妻は、ダビデの入城に対して不当な怒りと「失望」を示した）。それら四つの道しるべは、それぞれ契約の箱によって表されている。それら四つの道しるべの期間は、ダニエルの七十年の捕囚によって表されている。

2001年9月11日、「第三の災い」のイスラムは解き放たれ、その後抑えられた。

2020年7月18日は、イスラムの役割に関する予言が失敗に終わった日だった。死んだ干からびた骨に命を与えるメッセージは「四方の風」から来るが、それはイスラムの象徴であり、「真夜中の叫び」のメッセージを表している。米国における日曜法という国家的背教に続く国家的破滅は、「第三の災い」のイスラムによってもたらされる。これら四つの道標の期間は、ダニエルの七十年の捕囚によって表されている。

第一の天使の運動は第三の天使の運動を表しており、ミラー派の歴史における真夜中の叫びのメッセージは、最初の失望を招いた失敗した予測の訂正であった。

失望した人々は、聖書から、自分たちが遅延の時期にあり、幻の成就を忍耐して待たなければならないことを悟った。1843年に主を待ち望むよう彼らを導いたのと同じ証拠が、1844年には主が来られると期待するよう彼らを導いた。『Early Writings』247ページ。

ナッシュビルでのイスラムによる攻撃を示す証拠は、日曜礼拝の強制に対する反応として起こるナッシュビルへの攻撃を示す証拠でもある。『証の霊』の著作は決して外れるこ

とがない。ナッシュビルへの攻撃の預言は『証の霊』の著作に示されている。ナッシュビルに関するその預言は成就するが、ミラー派の歴史においてそうであったように、ナッシュビルへの攻撃に関するその預言は、かつて外れた預言の修正に基づくことになる。それは第四の道標において成就し、その道標は「裁き」を表している。

イエスはいつも、始まりをもって終わりを示される。そして、第一の道標である2001年9月11日は、イスラムによる攻撃であった。それゆえ、日曜法の裁きの時には、ナッシュビルに対するイスラムの攻撃があるだろう。ほかの標的が含まれる可能性も十分にあるが、「真夜中の叫び」のメッセージとは、最初の失望を生み出したメッセージを正すメッセージである。最初の失望を引き起こしたのは、エレン・ホワイトの言葉ではなく、予言に時間の要素を適用したという罪であった。

重要なのは、第一のメッセージの「力づけ」（ダニエルでは象徴的な七十年の初めに起こる）に始まる四つの道標が、常に同一の主題に貫かれていると認識することである。もしあなたが2001年9月11日を預言の成就として受け入れているなら、あなたは預言的に「隠された書」を食べたことになる。その真理を実際に食べた人はごくわずかだったが、ダニエルに代表されるように、バビロンの食物によって身を汚されまいと心に定めた者たちがいた。それでも、2001年9月11日が預言の成就だと公言しながら、それはイスラムではなく、ブッシュ家やグローバリスト、イエズス会、CIA、あるいは現代の陰謀論者がよく持ち出すお決まりの容疑者たちの組み合わせによるものだと主張する者たちがいる。アルファでありオメガであるイエスは、初めによって終わりを示されるので、もし私たちが2001年9月11日に預言的に何が表されていたのかについて誤っているなら、私たちは「真理」の預言の御言葉を正しく見分ける力を自ら損なっていることになる。

ミラー運動の歴史における第一のメッセージの「力付与」は第二の災いのイスラムであり、その力付与は、第三の災いのイスラムによってもたらされた2001年9月11日の力付与を象徴していた。

最初の道標におけるイスラムは、最後の道標におけるイスラムを明らかにする。最後の道標は裁きを表し、アメリカ合衆国は日曜法令において裁かれる。死者を生き返らせるのは、エゼキエル書三十七章の第二のメッセージであり、そのメッセージこそ第三の道標のメッセージ、すなわち真夜中の叫びである。これは封印のメッセージであり、イスラムの象徴である「ろば」に乗ってのキリストの凱旋入城によって型取られている。真夜中の叫びという封印のメッセージはイスラムによって担われる。

シオンの娘に告げよ。見よ、あなたの王があなたのところに来られる。柔和で、ろばに乗り、ろばの子である子ろばに乗って。マタイ 21:5

エゼキエルの第二の預言は「四方の風」から来る。それはイスラムの象徴でもある。この真理をはっきり理解することは絶対に不可欠である。というのも、「真夜中の叫び」というメッセージは、第三の災いのイスラムを、日曜法においてアメリカ合衆国に裁きをもたらし、その布告に続く国家的破滅を生み出す力として特定するメッセージだからである。

黙示録の七つのラッパは、異教ローマと教皇ローマの双方による日曜礼拝の強制に対する神の裁きであった。

1. コンスタンティヌスが西暦321年に最初の日曜令を施行した後、最初の四つのラッパは異教ローマに対して下された。
2. 第五と第六のラッパ（それはまたイスラムの第一と第二の災いでもある）は、538年にオルレアン公会議で制定された教皇権による日曜法に対して、教皇ローマに下された神の裁きであった。
3. 第七のラッパ（イスラムの第三の災い）は、近い将来、アメリカ合衆国が日曜礼拝を強制するとき、その国に下される裁きである。

第三の災いのイスラムは、2001年9月11日の第一の道標を表している。2020年7月18日にイスラムがナッシュビルを攻撃するという失敗に終わった予言は、第一の失望、すなわち第二の道標を表す。エゼキエル書三十七章の第二の預言に表されているイスラムの「四つの風」のメッセージは、真夜中の叫び、すなわち第三の道標を表し、そして第四の道標は、日曜法において2020年7月18日の失敗した予言が成就することである。これらは、ダニエルの七十年の捕囚によって表されている十四万四千人の預言的歴史において起こる四つの預言的道標である。

「真夜中の叫び」のメッセージの認識は、彼がネブカドネツアルの像の夢を理解するために祈ったとき、型においてダニエルに啓示された「秘密」の主要な要素である。彼の祈りは、啓示録11章の二人の証人にとっての「死の三日半」の終わりに置かれた道標である。9章に記録されているダニエルの「レビ記26章の祈り」は、ダリウスの第一年に行われた。これにより、彼の祈りは転換点に位置づけられる。

ミラー派の歴史における転換点は1856年であり、ジェームズとエレン・ホワイトによれば、その年にミラー派運動はフィラデルフィアからラオディキアへと移行した。同じ年に、ハイラム・エドソンの『Review and Herald』の記事において「七つの時」に関する「新しい光」が示されたが、1863年（「七つの時」後）には、「七つの時」は全面的に退けられた。聖書の預言における第一の王国と第二の王国の転換点において、ダニエルは「七つの時」の「散らし」に対する「解決策」として特定される「祈り」を捧げた。

三年半は千二百六十年の象徴であり、それはさらに『七つの時』の象徴である。2020年7月18日、フューチャー・フォー・アメリカのラオデキアの運動は、預言のメッセージを二度と時の枠組みに掛けてはならないという神の命令に対する反逆を明らかに示した。その運動はその後、エゼキエル書の死に絶え乾いた骨の谷を貫いている、黙示録十一章の『大通り』で、『殺され』『散らされた』。その『散らし』の時は、十人の乙女のたとえの『遅れの時』でもあり、その終わりに、彼らは今、『三日半』の『荒野』の内からの『叫ぶ声』によって、自分たちの墓から呼び出されつつある。

ミラー派が最終的に、自分たちがマタイの福音書二十五章とハバクク書二章の「待機の時」にいることを認識したのと同様に、「荒野で叫ぶ者の声」が叫ぶときには、「死んだ二人の証人」も自分たちがどこにいるのかを認識することが求められる。彼らは自分たちが「散らされている」ことを認識しなければならない。その認識は「祈り」への召しであるが、単なる祈りではなく、ダニエルの「レビ記二十六章の祈り」への召しである。そ

の特定の祈りなしには、リバイバルは起こらない。そのリバイバルは、ラオデキヤからフィラデルフィアへの移行点を画し、ダニエル書二章のネブカドネザルの像によって裏づけられているとおり、「七つのうちの八番目」という預言的現象を生み出す。

その悔い改めと告白の祈りがなされると、神はご自分の契約を思い起こし、散らされた民を集められる、というのが約束である。エゼキエルの最初の預言は骨々をひとつに集め、続いて「四方の風」の預言が、新しく生まれた「フィラデルフィア人」を強力な軍勢へと変えた……。その強力な軍勢は、黙示録11章によれば、「天使の雲」とともに「天に上げられる」ことになっている。そのとき彼らは主の「旗印」となる。

「ユダ族の獅子」が今明らかにしているダニエル書2章の「秘密」は、「七つのうちの八番目」という現象を確証しており、ダニエル書2章の他のすべての預言的要素も、黙示録11章の二人の証人の預言的順序と一致している。黙示録11章の二人の証人は、「日曜法」が施行されるその同じ「時」に、「旗印として掲げられる」。というのも、彼らは黙示録11章の「大地震」の時に掲げられるからである。その「大地震」は都の十分の一を打ち壊し、「十人の王」の中で主要な王はアメリカ合衆国であるが、これはちょうど、黙示録11章の成就としてフランス革命の「地震」がフランスを一掃したときに、フランスがそうであったのと同様である。

その地震の完全な成就是「地」の獣において実現し、「地」の獣の王国における日曜法は揺さぶりをもたらず。黙示録十一章の「地震」の完全な成就とは、「地」の獣が「揺さぶられ」、国家的背教に続いて国家的破滅が来るときの日曜法である。その時、二人の証人は「旗印として掲げられる」。彼らは、キリストが最後に天に昇られたのと同様に、「雲のうちに天に上る」。終わりの時代の神の民を象徴し、また同様に旗印として天に上げられることになっている弟子たちへの、彼の最後の言葉は、使徒の働きに記されている。

彼は彼らに言った、「父がご自身の権威によってお定めになった時や時期を、あなたがたが知ることは許されていない。しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受け、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」こう言ってから、彼らが見ているうちに、彼は上げられ、雲が彼を包み、彼らの目から見えなくなった。使徒の働き 1:7-9。

「旗印」となろうとする者たちは、「旗印」の働きを成し遂げるために聖霊の力を受けようとするなら、「時と季節」を当てはめることをやめなければならない。

第二章でダニエルに明らかにされた「秘密」は、恵みの時が閉じられる直前に封印が解かれるイエス・キリストの黙示の奥義である。その「秘密」には「七つの雷」の「隠された歴史」が含まれている。その歴史は、ヘブライ語のアルファベットの第一、十三、最後の文字を結び合わせて作られた語に基づいて構成されている。これらの文字を合わせると、ヘブライ語で「真理」を意味する語になる。イエスは「真理」であり、また初めであり終わりである。これら三つの文字は、第一・第二・第三の天使を表すがゆえに、あらゆる大改革運動の構造を表している。さらにそれらは、ダニエル書十二章で「清められ、白くされ、試される」と表現された三段階の精錬の過程をも表している。この三段階の試みと清めの過程は、フューチャー・フォー・アメリカによって二十年以上にわたり提示されてきたが、今や聖なる改革の系譜の内にある「隠された歴史」を表すものとして特定さ

れた。その「隠された歴史」は、今この恵みの時が閉じられる直前に至るまで封じられていた「七つの雷」の完全な成就である。

「七つの雷」は「第一と第二の天使のメッセージのもとで起こった出来事の描写」を表し、また「その順序で明らかにされる将来の出来事」も表す、と長く理解されてきた。そして今や、「『真理』の啓示」を通して、改革の路線の最後の三つの道標が、七つの雷の「隠された歴史」であることが明らかにされた。これらの道標は「最初の」失望から始まり、「最後の」失望で終わる。中央の道標は真夜中の叫びである。最初の失望は「待機の時」の始まりを示し、それは真夜中の叫びで終わる。真夜中の叫びのメッセージは「裁き」で終わり、そこで最後の失望が印される。

ダニエル書2章における最初の失望は、ダニエルが自分が「死刑令」の下に置かれていると認識したことだった。彼はそこで「時」を求め、それによって「遅延の時」の始まりとなった。それによって彼は「奥義」を悟り、すなわちそれは「真夜中の叫び」のメッセージであり、その後ネブカドネツアルに示され、彼がダニエルのメッセージを「裁く」ことができるようにされた。

ダニエルが示した夢とその解き明かしに対するネブカドネツアルの「裁き」は、「七つの雷鳴」の「隠された歴史」を表す三つの道標のうち第三のものを示している。その裁きはダニエル書3章でも取り上げられており、そこではダニエル書と黙示録において確固として用いられている原則、すなわち「反復と拡大」が表されている。

第3章は次の記事で取り上げますが、ここで指摘しておくべきは、第3章における第三の道標の審判が、最初の失望によって型示されていた最後の失望を明らかにしていることです。七つの雷の「隠された歴史」は、始まりと終わりが失望である三つの道標を明らかにしています。ダニエル書第2章では、最初の失望はネブカドネツアルによる「死刑令」と結びつけられており、第3章では、最後の失望はネブカドネツアルによる別の「死刑令」と結びつけられています。

「フューチャー・フォー・アメリカ」運動を表す「二人の証人」の「隠された歴史」は、2020年7月18日の失望を表している。その後、『黙示録』第11章の「三日半」で表されている「待ちの時」が始まった。「底知れぬ淵」から上ってきた獣によって「大通りで殺された」者たちの目覚めと復活は、神の預言の言葉に具体的に詳述されているが、単純に言えば、二人の証人が目覚めると、彼らはダニエル書第2章で表されている「奥義」を理解する。

その「秘密」とは「真夜中の叫び」のメッセージであり、彼らはそれを、やがて日曜法が到来し最後の失望が起こるダニエル書3章に至るまで宣べ伝える。最初の失望は、2020年7月18日に「ダニエル」に象徴される人々が経験した。最後の失望は、「十人の王たち」の指導者であるアメリカ合衆国が、国家の背教がイスラムによる国家的破滅を招くときに経験する。

次の記事で、ダニエル書第2章の要約と結論を終えます。

サタンは世界を虜にってしまった。彼は偶像の安息日を持ち込み、あたかもそれに大いなる重要性があるかのように見せかけている。彼はこの偶像の安息日のために、主

の安息日からキリスト教世界の崇敬を奪い去った。世界は伝統、すなわち人間の作った戒めにひれ伏している。ネブカドネザルがドゥラの平地に金の像を立てて自らを高めたように、サタンもこの偽りの安息日において自らを高めている。そのために彼は、天の装いを盗み取ってこれにまとわせた。レビュー・アンド・ヘラルド、1898年3月8日。